

青空へかざす掌^{てのひら}からっぽという味方だけ持ちいたるかな

古谷 円

うたをよむ

第14回 昭和女子大学 日本文公開講座

令和
8年

10月10日 土

会場 昭和女子大学（三軒茶屋）

14時↓15時30分

古谷円×須永哲矢×嶺田明美

歌人

日本語日文学科教授

日本語日文学科教授

日本語学の立場と歌人の立場から

短歌の「心」を「よむ」ことを、

それにとどまらない

短歌を題材に、語の意味と、

今年の日本文公開講座では、

探求してゆく時間に

したいと思います。

主催：昭和女子大学日本語日文学科（03-3411-5019）

Design: 鷺野宏デザイン事務所

参加無料・要予約



詳細はこちら

「びちばちと緑黄色を炒めおり
恋の逡巡はねかえす午後」(大森
悦子『ナッシング・スペシャル』)

この一首から何を読み取ります
か? 単なる色である「緑黄色」は、
みずみずしい「野菜」を連想させ、
「びちばち」からは、音と弾けるよ
うな元気が伝わってきます。ま
た、単なる時間を表す「午後」は、
「午前」でも「夜」でもないところ
に、絶妙な距離感や関係性を感じ
る人もいるでしょう。

折口信夫は、「歌は、どこまで
も、自分の心を詳しく、相手の心
を牽くようにいひ出だすものであ
ります」(『歌の話』)と述べていま
す。短歌には、詠み手の心が込め
られています。

日文公開講座「うたをよむ」:
本講座のタイトルをひらがなにし
たのには理由があります。「うた」
は「訴う(うったう...うたう)」、
「写す(うつす...うたう)」、「よ
む」は、「詠む(短歌を作る)」、「読
む(鑑賞する)」などの捉え方がで
きるからです。講座を通して、「う
た」を「よんで」みましょう。

第14回 昭和女子大学 日文公開講座

うたをよむ

須永哲矢

すなが てつや

日本語日本文学科教授

古典語と現代語、言語研究と学校教育の
つながりを日々考えている。『はじめまし
て、助動詞－はてしなく深くて不確かな古
典文法の世界』(昭和女子大学近代文化
研究所、2025年)「たぶん古文、ときどき駄
文」(笠間書院、WEB連載中)など。現代歌
謡の短歌化なども、こっそり試行中。

嶺田明美

みねだ あけみ

日本語日本文学科教授

生きた日本語の実態、ゆれや変化に興味
を持ち調べている。「上代から近代におけ
る形容詞『高い』の示すことからのその周
辺」(『藝文研究』123-1、2022年)、『作手
村誌本文編・「第6編第4節 方言」』(愛
知県新城市、2010年)など。本講演の古
谷氏とは大学時代からの友人。

古谷 円

ふるや まどか

歌人

昭和女子大学日本文学科在籍中から、短歌
を始める。本学卒業生・馬場あき子主宰の
「歌林の会」入会。2008年に第14回・日本歌
人クラブ新人賞を受賞。日常の生活や家族、
あるいは勤務する定時制高校での経験など
を題材にしつつ、時として現実から浮遊する
ような独自の感覚を詠み込んでいる。歌集
は、『千の家族』(2007年、角川書店)、『百の
手』(2016年、砂子屋書房)、『ひきあけを渡
る』(2024年、本阿弥書店)。

表面に記載のうたのエピソード

「大学生時代、思うように学びを深められず
焦る気持ちの中で生まれた。からっぽな掌だ
けしか持っていないけれど、だからこそ、これ
から素敵なものをたくさんつかめるはず、味
方だと思ふことにしたのだ。」

昭和女子大学 日文

お申し込み方法

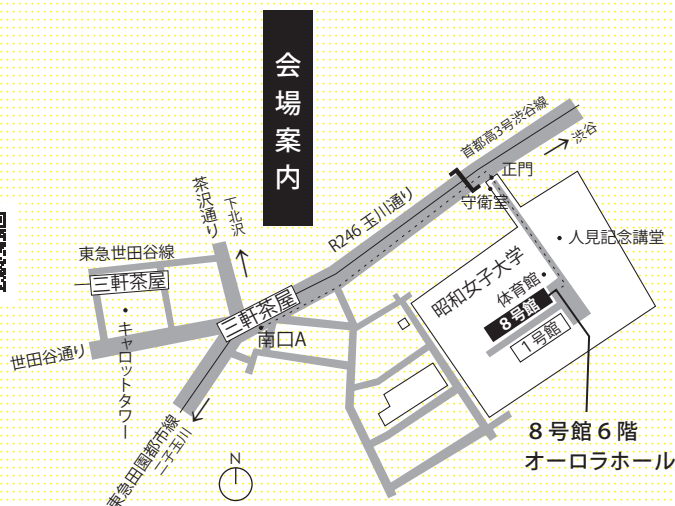


① QRコード等で特設ページへアクセス
<https://www.swu.ac.jp/swup/university/nichibun/openlecture.html>

② フォームにメールアドレスなどを入力・送信
後日、参加方法を記したメールをお届けします。

③ お問い合わせ先: 昭和女子大学日本文学科
03(3411)5019

会場案内



東京都世田谷区太子堂1-7-57
東急田園都市線「三軒茶屋」駅下車
南口A出口から地上へ
国道246号線を渋谷方面へ
(階段を上がる方向でそのまま直進)
正門まで約400m・徒歩約7分
正門より構内へ入り守衛室で受付
8号館正面入口からエレベーターで6階へ
※開場: 13時30分